海上の道＝海縁ネットワーク論その一
―移住開拓島の民俗学ノート（四）―

野地恒有

1　神話としての『海上の道』

移住開拓島とは近代以降の移住により形成された島のことである。本稿は、移住開拓島論構築のために、移住開拓島の観点から柳田国男の『海上の道』をとらえなおすことを目的とする。

『海上の道』（一九六一年）は、一九五〇年～一九六〇年に発表された柳田の作品を集めたもので、黒潮・南島・稲作を柱として日本民族文化の起源と他界観が開陳された、柳田最晩年の書である。『海上の道』には、「海上の道」「海神宮考」「みろくの船」「根の国の話」「鼠の浄土」「宝貝のこと」「人とズズダマ」「稲の産屋」「知りたいと思うこと二三」が所収されている。書名にもなっている巻頭の「海上の道」の要点は、始原の時代において漂着などによって沖縄付近の島々に貴重な宝貝が数多くとれることを知った原日本人が、その宝貝の魅力に導かれて家族とともに移住してきた。稲作の技術と信仰をもっていた彼らは、さらに稲作に適した土地を求めて島伝いに北上し、やがて日本列島に稲作が広がった、というものである。

『海上の道』は柳田総決算の書といわれる一方で、柳田自身のめざしてきた民俗学を自らたたきこわす「横紙破り」ともいえる「創世記の縮小日本版」の書（谷川　一九八六：八四～八五）とか、「学問以前の、椰子の実に仮託する初心の夢であり、……詩であり文学であり、彼にとっての一つの神話」の書（中村　一九七四：二五四～二五五）などととらえられている。

『海上の道』は柳田の詩的想像力が生んだ神話である。民俗学としては横紙破りではあるけれども、神話であればこそ、『海

上の道』は豊かな創造と発想の源となりうる。『海上の道』は移住開拓島をとらえるための有効な視点を与えてくれる神話である。

『海上の道』異考

しかし、まず最初に言っておくと、本稿は、民俗事象の分布などから周辺の島々さらには南の島々とのつながりを見出して、それらの地域を結びつける黒潮という海流のもつ文化史的な意義や役割を、現代において改めて確認する、というものではまったくない。むしろ、そのような黒潮文化の道のようなとらえかたを否定して、『海上の道』を移住開拓島の観点から従来と異なる方向で展開させることをめざしている。従来と異なる方向というのは、次の三点である。

第一に、『海上の道』を、移住元を求めた民族の起源ではなく、移住後における定住生活の形成という観点からとらえなおす。『海上の道』の「まえがき」は「日本人は如何にして渡って来たか」の一文で始まる。そして、『海上の道』全体の各所にちりばめられている「日本人は、最初どの方面からどこへ渡って来たか」、「どうして人が住み始めたのか」、「東海の島々に進出した一つの民族の、故郷はどこであったか」などといった文中の問い（柳田　一九七八：五、一五、三七、五一）とともに、こうした問いかけは、『海上の道』の読みを起源という一つの方向に導いている。それに対して、私は、移住後の生活に力点をおいて、〈いかにして住み続け得たか〉、〈いかにして定住に成功し得たか〉という問いに読みかえて、とらえなおしていく。

『海上の道』の微史

第二に、『海上の道』を〈微史〉的にとらえなおす。これまで、たびたび指摘してきたことであるが（野地　二〇一二）、柳田国男には、第二次世界大戦前、『海上の道』に見るような悠久な時間の流れにおいて起源を求める〈巨史〉的な島のとらえ方に対して、限定された時間幅で地域研究をおこなう微史的な島のとらえ方も見られた。その微史的なとらえ方が提示された書が『島の人生』である。この『島の人生』に所収されている一九〇九年から一九三四年に発表された戦前作品群は、島々の多様性をふまえた微史的なとらえ方に立っている。それに対して、『島の人生』に同じく所収されている一九五〇年前後に発表された戦後作品群は、島々の共通性をふまえた巨史的なとらえ方に立っている。『島の人生』が刊行された一九五一年は『海上の道』所収の論文が発表されている時期にあたるため、『島の人生』は『海上の道』の姉妹書のようにとらえられているが、実は、『島の人生』は巨史的なとらえ方の戦後作品群によって戦前作品群の微史的なとらえ方を覆い隠した書なのである。戦前作品群に見られる微史的なとらえ方は、海上の道論構築の過程で凍結されたのである。

また、これも同じく指摘してきたことだが（野地　二〇一二）、

第二次世界大戦前、柳田国男らにより創刊された雑誌『島』の第一巻三号の巻頭言は「島の個性」と題されて、この雑誌創刊の意義が、島の歴史の「漠たる綜括論」ではなく「出来るだけ詳細に且つ精確に、具体的なる観察を公けに」することにあると述べられている。つまり、微史による島の把握である。『島』に掲載された巻頭言は無署名であったが、そのいくつかは『定本柳田国男集』（一九六二年～一九七一年、筑摩書房）に所収された。しかし、この「島の個性」は『定本柳田国男集』には所収されていない。私はこれも柳田の文章であろうことをかつて指摘した（野地　二〇〇一）。「島の個性」（柳田　一九三三）は二〇〇二年刊行の『柳田國男全集』二九巻（筑摩書房）に所収された（柳田　二〇〇二）。『海上の道』は、いわば島の歴史の「漠たる綜括論」として展開されたわけで、『島』の巻頭言に見られるような島の個性を微史的にとらえることは、海上の道論構築過程で封印されたのだ。

私の移住開拓島という視点は、柳田の方向転換によって取り残された島の微史的なとらえ方に位置づけられる。つまり、『海上の道』を同時代の地域研究（移住開拓島の同時代生活誌）として展開させるということである。

海上の道とは海縁ネットワークである

第三には、海上の道を海縁ネットワークととらえなおす。海上の道とは海縁ネットワークのことである。海縁ネットワークは海のえにしによって作り出されるネットワークである。海にかかわる人やモノの移動によって作り出される関係である。ネットワークに「海縁」を冠するのは、土地に基づく関係の地縁や血筋に基づく関係の血縁に対立する言葉として明示させたいからである。移住社会は、血縁や地縁とは異なる、海を軸として広範囲に多方面に向かって作り出されてきた海縁ネットワークが重要な役割を果たしているのである。また、この関係は沿岸部だけのことではなく、内陸部との関係も含まれるので、海縁の意味するところは沿岸や海域とも異なる（野地　二〇一二）。

海上の道とは日本人の故郷という起源に続く道のことではない。限定された地域内に形成された海縁ネットワークのことである。地域社会の特質を海縁ネットワークからとらえることを、『海上の道』の課題として読みなおす。移住開拓島研究の目的は、海縁ネットワークによって維持された社会（海縁ネットワーク社会）の形成や特質を明らかにすることである。

2

ネズミの移住

それでは、『海上の道』を読みなおしていこう。まず、その中から「鼠の浄土」をとりあげる。「鼠の浄土」は、海を渡ってくる害獣のネズミをとおして、海の他界と行き来するネズミ

をめぐる島の信仰的意識を想起したものである。柳田の言いたいことは次の二箇所をあげておけば十分であろう。

「奄美大島の農民たちが、是ほどにもひどい毎年の害に苦しみながら、なお鼠に対して尊敬の意を失わず、かなしの語をつけてこれを呼ぶばかりか、一年のうちに少なくとも一日、通例は旧八月以降の甲子の日をもって、鼠のための物忌の日とし、鼠という語を口にしないのみか、もしかその姿を見れば害があると信じて、終日野原や畠へも出ずにいた……ハブという毒蛇の場合にも見られるように、むしろ、稀々に意外な暴威を振うのを実験した者が、これを神秘の力に帰するようになったので、他所の飢えたる鼠の群れが、海を渡って入ってくる時などに、とくにこの信仰は伸び拡がったのではないかと思う。」（柳田　一九七八：一七〇）

「鼠に対する島人の畏敬、ことにその実名をたやすく口にせぬという以上に、しばしば族長または祖霊に対すると同じ呼び名を、附与するという慣行には、意味があり、或いはまた人間の霊魂の去来する聖地もまたニライであり、鼠はたまたま是と出自を同じくし、その消息に通ずと認められた故に、あれほど無法な悪戯をするようになって後まで、過当の優遇を受けていたのではないかと思っている。」（柳田　一九七八：一八三）

他界と行き来するネズミというとらえ方に対して、私は別の観点から島のネズミについて考えたい。

「鼠の浄土」の第一段では、「島に鼠があまりに沢山いるので、人が住むことができない」という「鼠の島」の例が四例あげられている。そのうちの三例を以下にあげる。

山口県大島群島の片山島では、「隣の島から一里余りしかなく、平地も大分あるので、何度も開墾しようと渡ってゆく者もあったが、何分にも鼠が多く、小屋を掛けて泊まりこんでいると、夜分は入ってきて人の鼻を咬んだというような騒ぎなので、成功した者がないということだったが、それは今から三十五年ほど前の話、この頃はもう畠も拓かれ、耕す人も住んでいる……。」（柳田　一九七八：一五八）

山口県周防大島辺の端島では、「一旦開発せられて人家二十三戸、石高五十五石の検地まですんでいたのに、鼠があまりに多く農作を不可能にしたために、引地すなわち村を撤回したということが、岩国藩の旧記に誌されていて、それは享保十五年（一七三〇）の事実であるが、今日はまたふたたび四十戸余の家ができている。」（柳田　一九七八：一五八～一五九）

広島県倉橋島の羽山島では、「宝暦年間（一七五一）の倉橋風土記に、本浦の人来って畑を開く。鼠害甚だしき故にこれを

棄つとある……。」（柳田　一九七八：一五八）

これらの事例を出発点として、柳田は、海を渡ってきた、害獣のおそろしいネズミに「神秘の力」を見出し、ネズミを「根の国に栖む者」として根の国＝海のかなたの他界と行き来する信仰が生じたと展開させる。それに対して、私は、これら三例（恣意的に選択した三例ではなく冒頭の第一段にあげられた四例中の三例、残りの一例はネズミが多くて人が住めない鼠島の存在を説明する導入事例）がみな開墾、開拓、移住の時点のできごとであることにまず注目する。そして、そのネズミはどこから来たか。柳田は、絶壁に囲まれ船も近づけない孤島にさえネズミがいたことをあげて、ネズミの移住は便船によるのではなく、あくまで海を泳いで渡って来たことを強調する。しかし、私は、これら三例のネズミは海を泳いで渡って来たのではなく（そういうネズミもいたであろうが）、便船によるものと解釈する。なぜなら、開墾・開拓・移住のプロセスで往来がおこなわれる中で、人や物資とともに、ネズミも船に乗って渡って来たのだと想定するからである。往来が頻繁になればなるほど、ネズミも次々とやってきたであろう。ちなみに、このネズミの種類は、イエネズミかドブネズミであろう。

さらに一例付け加えておこう。桂井和雄の『土佐伝説集第二巻』には、高知県幡多郡下田町（現、現在四万十市）の事例として、「大島のネズミ神さま」という伝説が報告されている。下田町の河口には大島という無人島があり、そこには「大島神社」（祭神は大国主命）と呼ばれる小さなお宮がある。そのお宮には次のような伝説がある。

「この島は古くから対岸の百姓たちの手で耕作されていたようであるが、昔から野ネズミが多く、畑物を作ってもつくっても食い荒らされてしまうので、安永三年（一七七四年）とかに宮地近江正興という神官がネズミよけのために勧請したものであると言われております。けれども、一方ではこの神様をネズミの神さまと呼んでいて、この島の野ネズミの霊をまつったものであるとも言われているということでございます。」（桂井一九五四：一〇〇）

後半の「けれども」以下は、他界から来る動物ととらえる柳田に配慮した加筆のように思えるが、その前の部分は、開墾（出作りか）に伴うネズミの被害とネズミよけのための勧請という内容である。この「大島神社」も、大島開墾史におけるネズミ時代を示す遺跡である。

島のネズミの移入は海縁ネットワークを通しておこなわれたのだ。周辺地域との行き来が頻繁になればなるほど、つまりさまざまな海縁ネットワークが結ばれれば結ばれるほど、ネズミも入ってくる。定住生活を支える海縁ネットワークは、当然、負の流入物ももたらすのである。定住化の成功のために海縁

ネットワークの形成は必須であるけれども、同時にそれはネズミのような負の移入をももたらすのである。海縁ネットワークの形成は、移住社会の定住化に対してプラスとマイナスの諸刃の剣なのである。

人と自然との関係から見た移住史において、ネズミの被害はネズミ時代ともいえる定住プロセスの一画期をあらわしている。島の移住史におけるネズミ時代は定住化に向けた関門となる時期なのである。ここで言うネズミ時代とは、海縁ネットワークが開通されたことによりもたらされる移入物が島の生活に重大な被害を及ぼす期間のことをあらわしている。

ネズミとは、海縁ネットワーク形成に伴いもたらされる負の要素を象徴的に表したものである。その対象はネズミなくともよい。島の移住史において、海縁ネットワークの形成に対応する負の移入物が視点になるということである。

ネズミのとらえ方こそ異なっているけれども、柳田の言う通り、「島々の文化の特徴を作り上げるためには、鼠もまた一つの力」（柳田　一九七八：二〇九）なのである。

（附記）

ネズミの移住について一点附記しておこう。島にネコがたくさんいるという話題は第二次世界大戦前から見られ、柳田国男にも「猫の島」という一編がある。柳田の「猫の島」については私は別のところでふれた（野地　二〇一一）。現在も、時に島民よりも多いノラネコが観光客の話題になっている島がよく見られる。島に繁殖するネコは、たぶん、人間のもたらしたものであろう。しかも、その最初は、ネズミよけにために連れてこられたのではないだろうか。

タカラガイの力

次に、タカラガイをとりあげよう。それは、『海上の道』所収の「海上の道」と「宝貝のこと」の中でふれられている。本稿の冒頭でもまとめたように、原日本人が宝貝も求めて日本列島に渡って来たという本書の内容はよく知られていよう。そのことを示すのは次の箇所である。

「もしも漂着をもって最初の交通と見ることが許されるならば、日本人の故郷はそう遠方でなかったことが先ずわかる。人は際限もなく椰子の実のように、海上にただようては居られないのみならず、幸いに命活きて、この島住むに足るという印象を得たとすれば、一度は引き返して必要なる物種をととのえ、ことに妻娘を伴のうて、永続の計を立てねばならぬ。…どうしてそのような危険と不安との多かった一つの島に、もう一度辛苦して家族朋友を誘うてまで、渡ってくることになったのかということになるのだが、私は是を簡単に、ただ宝貝の魅力のためと、一言で解説し得るように思っている。」（柳田　一九七八：四二～四三）

「千に一つと言ってよい幸福に恵まれて、無人の孤島に流れ着き、そこに食物を求めようとして測らずも希なる世の宝が、さざれ小石のごとく散乱しているのを見つけたということなどは、一つの大きな民族の起源として、あまりにもたよりない夢か伝奇のようであろうが、正直なところきょうという日まで、是よりももっと有り得べき解説を、まだ私などは聴いていないのである。…仮に測らざる理由によって、一度はその岸に触れたことがあったにしても、再び家族をつれ、物種器什を船に積んで、来て住もうという決心をするだけの引力は何に見出し得たろうか。」（柳田　一九七八：四八）

引用文最後の「引力は何に見出し得たろうか」の部分は、〔すなわちそれは宝貝である〕という意味である。始原の時代に原日本人が宝貝の引力に導かれて海を渡って来たというのは、まさに柳田の空想である。しかし、「この南方の島々と、大陸との間の往来には、文字の記録よりも遙かに古い痕跡があり、是に参加した者に宮古の船があり、また宝貝があったというまでは、ほぼ知られている」（柳田　一九七八：四六）というように、「文字の記録よりも遙かに古い」時代、タカラガイが宮古島と大陸との往来を支えていたという見方は首肯できる。タカラガイをめぐる宗教的な民俗事象が宮古島にあるかどうかが重要なのではない。タカラガイが島と周辺地域を結びつけるかどうかが重要なのである。タカラガイを海縁ネットワークを作り出すものとしてとらえれば、タカラガイは宮古島の定住生活を成立させるための重要な自然物となっていたということができる。ただ、タカラガイが実際にそのようなものとなっていたかどうかはさだかではない。それは、あくまでも柳田の空想する海上の道神話の中の話である。

そこでタカラガイをとらえなおそう。タカラガイとは海縁ネットワークを作り出すものを象徴的にあらわした言葉である。象徴としてのタカラガイは、海縁ネットワークを形成させるものを意味している。タカラガイでなくとも何ものかにより、海縁ネットワークが形成されることによって定住生活は成立するのである。タカラガイの力とは海縁ネットワークを作り出す力のことである。

タカラガイと石炭

海上の道神話に沿って言えば、始原の時代、ある島へ漂着した人々がそこに「さざれ小石のごとく散乱している」タカラガイを見つけ、新天地となりうべき島の発見に驚喜したとしたら、それは、タカラガイの宗教的な重要性において驚喜したのではない。タカラガイがその島を周辺地域と結びつけるものであったからである。島の移住者にとって、タカラガイは海縁ネットワークを作り出すものであるからこそ価値があるのである。

海縁ネットワークを作り出すものという意味において、たと

写真１　軍艦島（長崎市端島）１　無人島化した移住開拓島

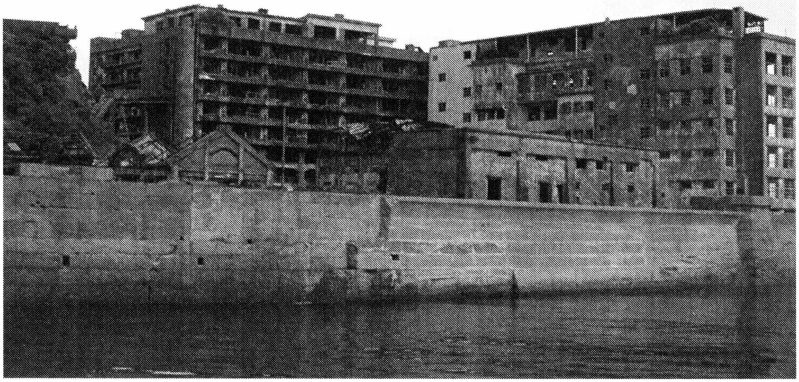

写真２　軍艦島（長崎市端島）２
海縁ネットワークを作り出すという意味において石炭とタカラガイは同じである。

えば、石炭もタカラガイと同じである。「軍艦島」と呼ばれている長崎市の端島は、石炭が作り出した海縁ネットワークによって成立した移住開拓島である。石炭は海縁ネットワークを作り出し、無人島であった端島を軍艦島という巨大な産業都市の島としたのだ。ただ、その島の海縁ネットワークを支えたのは唯一石炭だけであったため、石炭がその力を失うと、途端にその島は廃墟となった。一九七四年に無人島となった軍艦島は、今や、日本でもっとも有名な無人島化した移住開拓島である。海縁ネットワークを作り出すものはたくさんあった方が、移住開拓島の定住生活をより安定させ持続させることになろう。

定住の安定とは

『海上の道』所収の「海上の道」の後半部分では、宝貝の引力に導かれてやって来た人々は米を重要な携行品としていて、彼らが稲作を伝えたという稲作の南方渡来説が述べられている。これはもっともよく知られた部分であり、稲作の問題は『海上の道』全体を貫くテーマである。本論との絡みから、次の箇所をあげておこう。

「人が大陸から稲の種を携えて、この列島に渡って来た……人がその島をわが島と呼んで、安んじて住むようになれば、やがては生産の地が足りなくなって、行きやすい隣の島を物色することは、是は水平線外の冒険とは話がちがう。一番大きな促迫は、稲を作る適地の欠乏であったかと思う。漁獲は必ずしも定住を必要としなかったからである。」（柳田　一九七八：五二～五三）

「最初に彼ら〔島に渡ってきた人々のこと―引用者注〕は……、至って制限の多い、雨ばかりを頼らなければならぬ土地において、僅かな稲作を続けなければならなかったが、それは予期せざる遭遇であり、また偶然の大きな発見があったためと解せられる。いよいよ海辺の民の常道に復して、半農半漁の生計を持続し、また発展させるようになると、むしろ中間の小さな平島はさしおいて、次々と水豊かに草木濃く繁った、地形の雄大なる陸地に、将来の足掛りを、求めようとしたであろう……。」（柳田　一九七八：五五）

タカラガイの魅力に引き寄せられ、稲作を信仰のための重要な作物とした原日本人は、安定した稲作の適地である豊かな定住地を求めて、さらに移住をくり返していった、とまとめられる。引用した柳田の文章からわかるように、彼にとって、定住生活とは半農半漁の生計の持続と発展とくに稲作の生産を安定的におこなうことである。つまり、稲作の安定による自給自足社会の完成が定住化の成功なのである。これが柳田の描く定住モデルである。

それに対して私は、定住化の成功を内部における自給自足の

成立・充実とはとらえない。定住化の成功とは、海縁ネットワーク社会の成立のことである。「漁獲は必ずしも定住を必要としなかった」と柳田は述べているが、たとえ稲作であってもそれは定住の成立要因ではない。また、さまざまな生業を営むことによって組み立てられる自給自足社会の充実が定住社会の成立をあらわしているのでもない。漁業であろうと稲作であろうと農業であろうと何であろうと、半農半漁であろうとなかろうと、単一であろうと複合であろうと、要は外部との海縁ネットワークを作り出すこと、これがすなわち定住化の成功である。柳田の定住モデルでは、移住先の地は人っ子一人いない未開拓地で、移住先で先住者とのかかわりは想定されていない。私は、移住先の先住者たちとの関係こそ定住の成立にとってもっとも重要な要件であると考える。

移住先の定住生活を成立させる生業体系とは、外部との関係で構築された海縁ネットワークの体系のことである。定住生活を安定させるのは、周辺社会との間に多様な海縁ネットワークが張りめぐらされている生業体系を構築することなのである。これが私の定住モデルである。

【引用・参考文献】

伊藤千行・阿久井喜孝　一九九五　『軍艦島海上産業都市に住む―ビジュアルブック水辺の生活誌』岩波書店

桂井和雄　一九四八　「鼠に関する話」『土佐民俗記』海外引揚者高知県更正連盟

桂井和雄　一九五四　『土佐伝説集第二巻』高知県福祉事業財団

谷川健一　一九八六　「『海上の道』と天才の死」（一九六二）後藤総一郎編『柳田国男研究資料集成』六　日本図書センター

中村　哲　一九七四　『新版柳田国男の思想』法政大学出版局

西木正明　一九九一　「端島の女」『凍れる瞳』文藝春秋

野地恒有　二〇〇一　『移住漁民の民俗学的研究』吉川弘文館

野地恒有　二〇一一　「移住開拓島の民俗学ノート（一）」『日本文化論叢』一九　愛知教育大学日本文化研究室

野地恒有　二〇一二　「〈海縁〉ネットワークの形成―移住開拓島の民俗学ノート（二）」『日本文化論叢』二〇　愛知教育大学日本文化研究室

椋　鳩十　一九七三　『ネズミ物語』偕成社

柳田国男　一九三三　「島の個性」『島』一（三）　一誠社

柳田国男　一九七八　『海上の道』岩波書店

柳田国男　一九八九　「島の人生」『柳田國男全集』一（ちくま文庫）　筑摩書房

柳田国男　一九九〇　「猫の島」『柳田國男全集』二四（ちく

ま文庫）筑摩書房
柳田国男　二〇〇二「島の個性」『柳田國男全集』二九　筑摩書房
吉村　昭　一九八三「海の鼠」『魚影の群』新潮社

本稿は、平成二五年度～平成二八年度科学研究費（基盤研究(C)）「移住開拓島に構築される生業体系に関する民俗学的研究―定住化と無人島化の事例比較―」（課題番号二五三七〇九〇四）の年次報告（一部）である